

想定外の結末

2023・12・6 重枝 一郎

前号の校長研修だよりは「ウインザー効果」のタイトルで書いた。この中で、「ウインザー効果」の話に行きつくまでに、「アドバイスのリスク」の話を書いた。これは、「問題」の背景というか、本質というか、そこに手が届いていないことが、最近の生徒指導では増えたという話である。だから、生徒の悩みや苦しみに共感し、一緒に整理しながら、考えや行動をつくっていくことが大切だと。

先生方にこんな経験はないだろうか。

いわゆる学校生徒指導上のルールでのスマホの預かりである。

本校でも、学校内では原則使用禁止となっている。生徒が、そのルールを逸脱して、校内で使用したのを発見した時、一旦預かるというものである。このような場面は、よくあるのかもしれない。ただ、その背景的な「問題」も含めて、先手的に教師の語りをすることは大事である。ダメなことはダメというだけでは弱い。

例えば・・・

『以前私の担任だった、とてもまじめな生徒の話なんだけど、その生徒が、昼休みにスマホを必死に触っている姿がたまたま目に入ったんだ。一瞬、「あの子が?」「どうして?」と思うくらい意外だったんだ。私が近づいても全く気付く様子もないくらいスマホを触っていた。ついに、私に気づいて、困ったような表情を浮かべて、黙って私にスマホを差し出したんだ。私は一言「預かるね」と言ったら、彼女は無言でうなずいた。ルール上の預かり期間後、彼女が職員室にスマホを引き取りにやって来た。私は、「スマホがない生活はどうだった?」と尋ねた。次の瞬間、彼女は押し止めていた感情が溢れ出たような激しさで泣き出した。私は驚きつつ、彼女の言葉を待った。突然の涙には何かの理由あるはずと思い、しばらく待った。落ち着きを取り戻した彼女は、気持ちの整理がついたように語り始めた。最近、友人とメールで連絡を取り合うようになったが、連絡が来たらすぐに返事しないといけない雰囲気になって、家でも学校でもスマホが気になって仕方がなかった。このままではいけないと思ったけど、どうすることもできないでいたところを先生に見つけてしまった。彼女は意を決したような表情で話を続けた。「しばらくスマホから離れて、気持ちが楽になりました。今日この後、友だちには、家や学校にいる時はすぐには返事はできない、とはっきり言います」。そして、彼女は私に、「すみませんでした」でも「もうしません」でもなく、「ありがとうございました」と言って、笑顔で戻っていった。

彼女の後姿を見ながら、私は少し怖くなった。もしもあの時、彼女がスマホをしていることに気づかなかっただら、彼女は今も苦しんでいたかもしれない……。私にとって、**想定外の結末**だった』

この話は、私の経験談ではない。作り話である。しかし、このような語りは、先手的な生徒指導になる。フィクションでも、生徒の内面に寄り添う話になる。

私たちは目の前の生徒を見ている。しかし、今見えている生徒の姿は、必ずしも内面と一致した姿であるとは限らない。

スマホ依存の生徒がいたら、話してみたらどうだろう。